



平成一九年度

地域国際化協会職員海外研修について

(財)自治体国際化協会支援協力部地域支援課

地域国際化協会職員海外研修は、地域の国際交流を推進する中核的民間交流組織である地域国際化協会連絡協議会が主催する研修である。今年度は、昨年に引き続きオーストラリアを訪問した。この研修の目的は、職員が海外の団体を訪問し、活動現場の視察や関係者との意見交換などを通して見識を深めることにあり、今回は五協会五人の職員が参加した。八日間という短い期間ではあったが、各地域で外国人住民に対する支援施策に対して、オーストラリアの先進的事例をどのように応用できるかを共に学び、意見を交わした経験は、参加者一人ひとりの大きな糧となったようである。

オーストラリアの多文化共生施策における活動内容、関係団体の連携、財源確保などを学ぶことは、日本の外国人住民に対する支援施策の推進に資するものであり、参加できなかった読者の皆さんとも、この誌面をもって研修内容を共有したいと思う。

研修一日目の一月二十七日(日)、肌寒い天気の中、成田空港に集合。参加者は、福岡、徳島、愛知、神奈川、青森の五県から来ており、教員研修の一環として国際交流協会での研修中の人、自治体から出向中の人など、立場も仕事内容も異なる参加者同士の自己紹介に花を咲かせつつ、カンタス航空深夜便に搭乗し、いざ真夏のオーストラリアへ向かった。

まず、最初に訪問したのは、(財)自治体国際化協会シドニー事務所である。研修二日目、空港到着後すぐにホテルに荷物を置くと、その足でシドニー事務所へ向かいシドニー事務所の職員に温かく迎えられ、池田所長からオーストラリアの政治体制や経済状況などの概要について説明を受けた。オーストラリアの政府は、連邦、州、地方自治体の三層制となっている。連邦政府の権限は、憲法に規定されたものに限定されている一方で、州政府の権限は、公立の学校・病

院、警察、消防など広範にわたる。地方自治体の権限は、生活環境関連サービスが中心である。二〇〇六年度の最大輸出相手国

表：平成19年度地域国際化協会職員海外研修 日程表 7泊8日(内、機内泊2日)

	月日	始	終	
1日目	1/27 (日)	20:20		成田空港→キングスフォードスミス空港(シドニー)
2日目	1/28 (月)	8:15		キングスフォードスミス空港→シドニー市内
		11:00 午後	12:00	視察① (財)自治体国際化協会 シドニー事務所 シドニー市内視察 (オーストラリア国立博物館など)
3日目	1/29 (火)	10:00	11:00	視察② 在シドニー日本国総領事館
		14:00	16:00	視察③ Australian Chinese Community Association
4日目	1/30 (水)	10:00	11:00	視察④ Fairfield City Council <昼食> 市役所担当職員と意見交換
		14:00	16:00	視察⑤ カブラマッタ市街視察
5日目	1/31 (木)	10:00	12:00	視察⑥ NSW Adult Migrant English Service
		14:00	16:00	視察⑦ Immigrant Women's Speakout Association of NSW ("Speakout")
6日目	2/1 (金)	10:00	12:00	視察⑧ Sydney Multicultural Community Services Inc. (SMCS)
		14:00	16:00	視察⑨ Blacktown Migrant Resource Centre
7日目	2/2 (土)	22:05		キングスフォードスミス空港移動→成田空港
8日目	2/3 (日)	6:10		成田空港着・解散

は日本であり、オーストラリアの日本語学習者は三五万人を超えるという。日本への旅行者も増加傾向との説明もあり、親日の様子が伺えた。研修の後、オーストラリアでの最初の食事として、昼食にはドイツ料理をいただいた。このほかにも、八日間の研修期間中は「多文化共生社会・オーストラリア」を、食の面からも感じられるようにと、ギリシャ料理、ベトナム料理、中華料理、インド料理などさまざまなレストランに案内していただき、「今日は何料理だろうか」と食事の時間がとても楽しみだった。

研修三日目午前、在シドニー日本国総領事館を訪問。稲留主席領事から、主に経済面での日豪関係や、移民政策について説明を受けた。移民管轄専門の省があり、移民政策が充実しているという印象のあるオーストラリアだが、「誰でも受け入れるというものではなく、長い目で見てオーストラリアに利益をもたらしてくれる人を受け入れていくようである。つまり留学や観光などは国家に経済的利潤を生むため、ビジネスとして割り切って受け入れていく。そのため、受け入れ制度やサービスが充実し、自国の利益となる政策が徹底されているという。



↑(左から)オペラハウス、ハーバーブリッジをバックに参加者で記念撮影

午後からは、初めてのNPO訪問である。どんな話が聞けるのだろうか、と心を躍らせながら、Australian Chinese Community Association (ACCA)に向かった。この団体は在豪中国系移民への支援と定住促進を目的として、一九七四年に設立された。主な事業は、中国系移民とオーストラリア人との相互理解の促進、学校教育を通じた中国文化・言語を維持するための奨励や助成などである。移民として来た子どもたちが、母語を忘れないように母語支援の補習教室を運営している。また、認知症患者のためのデイケアセンターの運営では、広東語・北京語を話せるケースワーカーを配置したりと、サービスのきめ細かさに驚かされた。

研修四日目は、フェアフィールド市という、ニューサウスウェールズ州に一五二ある地方自治体の一つを訪問した。インドシナ難民の収容所が近くにあったことからベトナム系移民が多数居住するようになった市である。海外で生まれた人の全人口に対する比率は五二・五%と、オーストラリアで最も高い。移民の母国二三カ国のうち九五%は非英語圏であり、七二・五%の住民が家庭で英語以外の言語を使用している。母語の言語数は七〇言語、宗教は五〇に及び、まさに多文化社会。市長自身も、旧ユーゴスラビア出身で、難民キャンプで過ごした経験を持つ人である。午後は、市職員と共に、ベトナム系、中国系移民によるレストランや土産物屋が軒を連ねるカブラマッタ地区を

視察した。その後、市街地を車でまわり、トルコの教会の隣に、中国の寺院、さらにその隣にはフィリピンの教会が建ち並ぶ様子を見ることができた。人がやって来るといふことは、同時に、宗教もやって来るといふことである。互いの文化を尊重しながら、共生するまち並みは、新鮮な驚きを与えてくれた。



↑ACCAのスタッフの方とともに

研修五日目午前は、移民や人道的難民などを対象とした無料の成人向け(基本的に一八歳〜高齢者まで)の英語教室を提供している州政府機関 NSW Adult Migrant English Service を訪問。一九五二年の創設以来、一〇〇万人以上の移民・難民が学んだ実績を持つ。海外で取得した資格や技術を持つ移民を対象に就職するために必要な英語能力向上コースや、さらに高度な英語力を希望する人向けの有料の講座も提供している。午後からは、Immigrant Women's Speakout Association of NSW を訪問。この会は、移民女性(特に言語や文化で多様な背景を持つ移民)への支援を目的として設立されたNPO団体である。ドメスティックバイオレンス(DV)のほか、教育、就労、子育て、健康などの課題解決に向けて取り組んでいる。研修六日目、団体を訪問する最

終日となった。午前中に訪問した、Sydney Multicultural Community Services は、言語・貧困・孤立・障害などの理由から社会の恩恵を得ることができない人々を直接手助けすることを目的とした NPO 団体である。

不利な立場にあり、主流にいない移民や難民を、彼らの文化的アイデンティティは保ちつつ、オーストラリア社会に参加させ、また、社会に正當に評価されるための手助けを行っており、移民たちの母語によるサービス提供を行っている。午後の訪問先、Blacktown Migrant Resource Centre は、多言語定住サービスを提供する団体で、一九八五年に設立された。当初は Blacktown 地域で移民・難民への定住支援を主に行っていたが、現在では、多言語情報の提供、相談窓口の運営、コミュニティとのネットワークの構築、コンサルティングのほか、健康・雇用・住居関係・女性問題・若者問題・高齢者などの分野でさまざまな事業を行っている。この日の訪問団体二カ所のスタッフが同様に言っていたのは、「相談業務に当たる人は世界情勢・文化的背景に通じていなければならない」ということである。また、相談時に気を付けるのは、移民の文化を尊重しつつ、彼らと同化 (Assimilation) させるのではなく、統合 (Integration) させること。多文化ソーシャルワーカー・コーディネーターの養成が、日本の各地域でも進められているが、このような事業に取り組むスタッフは、マニュアルだけで育成できるようなものではなく、いか

に「その移民に寄り添う」ことができるか、ということが重要であると感ずる一日であった。

今回の訪問団体では、ほかの団体との連携についての話を聞くことが多く、分野の異なる団体が横のネットワークでつながっていることに少なからず驚いた。各団体はサービスの内容に専門の分野 (語学・健康・医療・家庭内暴力など) を持ち、各々の専門性について情報を共有している。定期的に団体同士でミーティングを持っているところもある。このような団体間のネットワーク強化は、見習うべき点ではないだろうか。協会員、協会と自治体間、協会と NPO 間、そのネットワークを広げ、さらに各々の強みを活かしていくことで、通訳・医療・住居など、各分野の支援はきめ細かく、さらに内容の深いものとなっていくのだろう。

海外研修感想

(財)愛知県国際交流協会 本庄 俊和

小学生のころ、学校の図書室で「世界の国々」という類の本を読んだ。「世界人口は三五億人」で、「オーストラリアは白豪主義の国」だと書いてあったことを今でもよく憶えている。月日は流れ三〇幾余年後の二〇〇八年、オーストラリアは世界で最も成功した多文化主義の国として知られるようになっていた。なんて鮮やかな転換。国家はこうも変わるのか。最近、日系ブラジル

人をはじめ外国人県民が急増している愛知県の一地域国際化協会職員としても、その秘密をぜひとも知りたかった。

ダウンタウンを歩くと、さすがに多数派は白人だがアジア系も確かに多い。ホテル近くのセブンイレブンの店員は、日本へも出稼ぎに行つたことがあるというインド人だった。大手スーパーのレジ係も半数以上はアジア系の風ぼうである。

オーストラリアが白豪主義を捨てて多文化国家となったというのは本当だった。今や海外出身者の人口比率二九・一%、家庭で英語以外を話す人口比率二二・五%という多文化・多言語国家である。その象徴と言われるのがサッカーのオーストラリアナショナルチーム「サッカルー」だ。二〇〇六年ワールドカップでイレブンの半数を占めたのはヨーロッパリーグで活躍するクロアチア系二世。ほぼ日本生まれの選手のみ「サムライブルー」を一蹴するや、準優勝まで上り詰めてしまった。ちなみに、そのクロアチア系選手のほとんどは今回訪問したフェアフィールド市の出身だそう。

国境を越えて優秀な人材が集まったり、



↑カブラマッタ市街地の様子。アジアの雑貨や食品を扱う店が建ち並ぶ。通りを歩いていると、ここがシンドニーであることを忘れてしまう

おいしいエスニック料理を味わえたりするのは確かに「多文化」のよいところだろう。でも、「だから多文化主義万歳」と言うのはあまりナイーブ過ぎるかも知れない。実際には、フェアフィールド市で聞いたように新移民受入れには常に社会的コストがつきまとう。古くからの住民の中には当然、反発もある。レバノン系の若者と白人の若者との衝突や反アジア主義を掲げる「ワン・ネーション党」のニュースは日本でも大きく報じられていた。多文化社会であることと関係があるかどうかは分からないが、都市部の治安は確実に悪くなっているという住民の声も聞いた。サッカーやベトナム料理だけでは国民的コンセンサスは得られないだろう。

オーストラリアが「多文化主義」を採用した理由は、国の成り立ちを知ると見えてくる。もともと大英帝国の植民地としてスタートし、移民を受け入れることで発展してきた国である。日本の二〇倍という広大な国土を持ち、「人が少ない」ことが常に課題であり続けた。国家を維持するために移民を、それも、なるべく優秀な移民を入れるためには、肌の色なんかにこだわってはいられなかったのだろう。オーストラリアが七〇年代に白豪主義を捨て「多文化主義」を掲げたのは、「鮮やかな転換」というよりは、大国の狭間で生き残りをかけた現実的かつ合理的な選択だったのかも知れない。

今回の研修では、オーストラリアが「多文化主義」を維持していくためのさまざま

な施策を実施する公的機関、民間機関の代表者や担当者から直接、お話しをうかがう機会をいただいた。どの機関においても、移民ができる限り早く社会に適合できるように本気の取り組みを行っていた。新移民に五〇時間の無料英語学習を保障し、多言語での情報提供に力を入れ、高齢化した移民のための特別の介護プログラムを取り入れ、協議会などを通じて移民コミュニティからの声に常に耳を傾ける。その包括的で実効的な取り組みを見ていると、移民支援がとりもなおさず「よりよい社会を作る」ことにつながるのだ、というこの国の強い信念が感じられるようだった。



↑夕食の一コマ。各地域での取り組みについて課題を共有したり、互いの仕事について語ったり

オーストラリアへ行く前から訪問先で質問したいと思っていたことがある。「多文化主義」というものがEU諸国の「社会統合」とどう違うのか。どんなに高い理想が掲げてあっても、食べるためには職がいるし、そのためには言語も含めてその社会に適合するしかないのではないか。あえて「多文化」を標榜する意味はあるのか。けれども、訪問先でのさまざまな取り組みを見ているうちに、それがいかにも愚問のような気がしてきた。現実に目の前に移民がいて、できる

だけ早く適合してもらわなければならない。そのためにはどうしたらよいか。考えるべきはそれだけなのだ。何十もの言語が飛び交う社会で、哲学としての「マルチカルチュラルイズム」なんか関係ない。ここでは、「多文化」が理想ではなく「現実」なのだ。そして、その「現実」を前に情熱を持って取り組んでいるたくさんの人に出会えたことは今回の研修の最大の収穫だった。今、研修を振り返ってまず思い出すのは、各機関で生き生きと働いていた人たちの顔、顔、顔である。出会った人々を思い出すにつけ、オーストラリアの移民政策を支えているのは制度や方針などのシステムではなく「人」なのだという気がしてくる。

インターネットが普及している現在だが、そこへ行かなければ分からないことがある。同じく外国人支援に携わる人間として、「多文化主義」の一端に直に触れたのは得難い体験だった。熱心に説明していただいた訪問先の皆さまをはじめ関係者の方々に、心から感謝の意を表したい。帰朝した今、その恩に報いるためにも、今回学んだことを活かして外国人支援事業を充実させていく責務を感じているところである。



↑多言語でのサービスを提供するSMCS事務所の玄関。歓迎を意味する言葉が15カ国語で表記されている



(特活)とんだばやし国際交流協会 「未来を築く子育てプロジェクト」未来賞を受賞

(財)自治体国際化協会支援協力部地域支援課 高野 花子 (財)京都市国際交流協会派遣

(特活)とんだばやし国際交流協会が取り組む、外国にルーツを持つ子どもたちのためのサマースクールが、住友生命創業一〇〇周年記念事業「未来を築く子育てプロジェクト」子育て支援活動の部において、未来賞を受賞しました。二〇〇八年二月一八日に東京のホテルニューオータニで行われた表彰式に出席された、とんだばやし国際交流協会の真嶋克成理事長、金和子副理事長、そして前川仁三夫事務局長にお話をうかがいました。

大阪府富田林市には、二九カ国から約一〇〇〇人の外国人市民が暮らしています(二〇〇八年一月末現在)。

その中で、大阪府教育委員会が大阪南河内地域の他団体と共同で、帰国渡日児童生徒のための進路ガイダンスを開催したところ、小中学校を日本で学んだ子どもでも、高校進学をするための学力が十分に身についていない実態が浮き彫りになってきまし

た。そこで、夏休みに外国にルーツを持つ子どもたちの学習と遊びの場を提供するサマースクールが開催されました。

実施に当たって、教育委員会が新任教員研修と位置付け学習のサポートを行いました。午後からはスイカ割りや工作などをするほか、子どもたちの保護者がそれぞれの国の遊びや言葉などを教えました。前川事務局長は、「子どもたちには自分のルーツに誇りを持って生きてほしいし、周りの大人もそのルーツを受け入れているということ子どもたちに知らせたい」とその意義について語りました。

このサマースクールが子どもたちを元気づけるきっかけになったと同時に、新規採用の先生たちにとっても、外国にルーツを持つ子どもたちとどう接していけばよいのかを考える研修の場にもなりました。また、地域のグループが昼食づくりをしたり、協会の韓国語や英語講座の受講生もスクールの運営に携わったりと、行政や教育委員会、学校、地

域社会など、日ごろから協会とつながりの深い関係者たちが一丸となり、「地域の外国にルーツを持つ子どもたちは、地域の子」という認識を持って開催することができました。

今回の受賞について金副理事長は、「このような事業を通して、外国にルーツを持つ子どもたちの居場所が増えていき、さらに周りもお互いに協力し合うことで地域がよくなっていくことを期待します」と受賞の喜びを語りました。また真嶋理事長は、「日本社会が多様化していく中で、多文化な子どもたちへのかわりが重要であることを認めてもらえたことをうれしく思います。時代に必要なものとして位置付けられたのだと思います」と述べ、今後はサマースクールに限



↑左から、前川事務局長、真嶋理事長、金副理事長

らず、年間を通して外国にルーツを持つ子どもたちの出会いの場を増やしていきたいと語っておられました。